自然言語処理 Vol.2 No.2 編集後記

「自然言語処理」も 3 冊目となり，編集するほうもようやく一段楽といった感じです．創刊号の発行が予定より少し遅れたために，創刊号と第 2 巻の第 1 号の間が非常に短く，創刊号を出したからといって一段楽というわけにはいきませんでした．

前号の編集後記にもあったように本誌の表紙の色は pantone warm gray 4C いう名前の色ですが，創刊号 (第 1 巻 1 号) と第 2 巻 1 号を並べてみて色が若干違うことに気づかれた会員の方もいらっしゃるかと思います．善意に解釈すれば巻が変ったので表紙の色も変ったのだとも思えますが，本号でその真相はばれてしまうでしょうから，ここで若干説明しておきましょう．結論から申しますと創刊号と前号の表紙の色が違うのは意図してのことではありません．pantone warm gray 4C という色は我々がお願いしている印刷所ではあまり標準的な色ではないため，毎回インクを調合しているそうです．そして，この程度の色の違いは誤差範囲だそうです．商業雑誌などでは，最終印刷の段階で，編集の人間が印刷所の輪転機の横に立ち会ってインクの色を調整するそうです．こういう裏話を聞いて他の学会の学会誌をみるとやはり号によって多少色が違うことに気づきます．とはいうものの毎回微妙に色が違うというのも気持が悪いので，今後，表紙の色をもう少し標準的な色にするとか，毎回違う色を使うとかの検討が必要かもしれません．

さて，本号が会員のみなさんのお手元に届くころには，第 1 回の年次大会も無事終了していることと思います．今回，実行委員としても大会のお手伝いをさせていただく機会を得ましたので大会の裏事情についても少し述べたいと思います．まず，発表申し込みが予想以上に多く 90 件を越えました．これは予定していた件数の約 2 倍です．当初，2 トラックのパラレル・セッションで十分だろうと予想していたのですが，すべての発表を 2 日間のプログラムにおさめるにはトラックをもうひとつ増やさざるをえませんでした．また，発表時間も当初の予定よりは若干短くなってしまいました．本来ならシングルトラックで全員の発表をじっくりと聞けるような構成が望ましいのかもしれませんが，今回は予想外に申し込みが多かったためこのようなプログラム構成となりました．発表の内容については，多くの会員の方が大会に参加されたことと思いますし，私自身，現時点ではまだ発表を聞いていないので感想は述べられませんが，タイトルを見ただけでも非常に興味深そうな発表が多くあります．ただ，発表を分野別にみると言語処理関係の発表が多く，言語学関係の発表が少ないように思います．言語処理学会の重要な役割のひとつとして言語学の研究者と言語処理の研究者が議論できる場を提供することがあると思います．今後，言語学の研究者の方にももっと広報をして，両分野の発展に貢献できるような学会に育てたいと思います．そのためには，論文誌に分野をまたいだ質の高い論文が数多く掲載されることが必要不可欠です．論文誌の方にも，大会の発表論文に負けないくらい活発な投稿をおねがいします．

徳永 健伸 (東京工業大学)